

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 金 三淑

論文題目 暗号化の文学的手法と植民地的実存
—李箱解釈の一視座—

論文審査担当者

主 査	名古屋大学教授	涌井	隆
委 員	名古屋大学教授	浮葉	正親
委 員	名古屋大学教授	田所	光男
委 員	名古屋大学名誉教授	前野	みち子

本論文は李箱の文学が暗号化されているという仮説を立証しようとする試みである。暗号化とは論者のことばによると〈意味の疎通を拒否しているように見せかける仕掛け〉である。謎めいた作品を詳細に読み込み解読することによって植民地に生きた李箱の実存に迫ろうとしている。

李箱が生まれたのは 1910 年 9 月 23 日、既に植民地になっていた朝鮮であった。亡くなったのは 1937 年 4 月 17 日である。1910 年 8 月 29 日に公布された韓日併合条約で、朝鮮は日本の植民地となり、1945 年、敗戦による「大日本帝国」の瓦解により朝鮮は日本の植民地から解放される。李箱は完全な朝鮮でもなければ、完全な日本でもない日本の植民地朝鮮を生き、日本語と朝鮮語で作品を残した。彼の作品は、高校の教科書に広く採用されその名を知らない人がいないほどの国民的作家としての地位を確立している。朝鮮語による先行研究の数は膨大であるが、日本ではそれほど知られていない。

第 1 章は、初期日本語詩に含まれる暗号をまとめて扱っている。「眞々 5"」、「すてつき」、「w\I」、「△」・「俺」・「▽」などの表現を暗号言語として捉え、その意味の解読を行っている。「異常ナ可逆反應」については、先行研究では誤って解釈されてきた「眞々 5"」(牢獄の鉄格子の幅が心 5 インチ)という表現を作者の意図に沿って正しく読み解くことにより、植民統治下の朝鮮がパノプティコン式の牢獄によって暗喩されていると論じている。この詩に関しては、非常に説得力のある解釈に成功している。ただ、「破片の景色」や「▽の遊戯—」についてはそれほどの成功を納めていない。しかし、部分的に斬新で説得力のある解釈を施している。

第 2 章は短編小説「翼」の構造分析を行っている。「翼」を読み解く鍵として、李箱が描いた 2 枚の挿画とプロローグに注目し、暗号としての二重構造について論じている。表面的には、怠惰な男と娼婦の女の話という風に読めるが、植民地的実存の葛藤と希望を語る裏の話とつながっていて表裏一体の構造物を成していると結論づけている。具体的には、男と娼婦である妻が、分裂した李箱の中に同時に存在する側面であることを、2 枚の挿画とプロローグから読み解き、さらに、「翼」における「私」と「妻」との関係と、暗号としての詩語である「△」・「俺」・「▽」との関連性を探り当てることによって、李箱の作品が実際の女性関係から生まれたという先行研究の通説を再考する必要性を示している。記号「△」・「俺」・「▽」が詩に現れたのは 1931 年で、李箱が一人目の女性、娼婦の錦紅と出会ったのは 1933 年である。時間軸上において「△」・「俺」・「▽」の構造のほうに先がある。したがって、李箱と三人の女性との関係は事実であるにしても、李箱の作品がその事実を踏まえて書かれたと見る見解は修正する必要があるとして、先行研究を論破している。

第 3 章は短編小説「龜龜會冢」の叙述構造と人物造形の分析である。「龜龜會冢」(1936. 6 月)と「翼」(1936. 9 月)は 3 か月の時間的間隔をおいて創作されており、人物の性格面でも類似性を持つと先行研究で指摘されている。分析において、李箱の視線が〈都市の散歩者〉としてではなく、〈都市の生産者〉として向かうところに注目し、小説「龜龜會冢」を植民地都市空間の「京城」と「仁川」、特に「仁川」という場所とそこに名指された記号化した地名を中心に読み解いている。それを通じて、「龜龜會冢」には植民地化に対する李箱の批判的な態度と、同時に近代化に対する憧れの二面が表裏一体化して描かれていることを明らかにしている。この二重構造は「翼」にも見られるものである。

第 4 章は京城に開店したカフェに李箱が残した落書きとその同時期に創作された初期日本語詩「空腹——」を関連させて、詩の解釈を行っている。日本語のふりがな表記法に注目して李箱の暗号化との関連を探り、「異常ナ可逆反應」と他の 5 編の詩との繋がりを論じ、初期日本語詩「空腹——」を李箱の現実認識と葛藤が現れた詩として解釈している。さらに、李箱の日本語詩の表記法について、これまで見落とされてきた 1930 年代当時の漢字カタカナ交じり文と漢字ひらがな交じり文の使い分けの状況に即して分析している。最後に、李箱にとって日本語と朝鮮語とは何であったのか、という二重言語の問題についても考察を加

えている。

総じて、本論文は、これまで日本の植民地支配とは無縁なモダニスト詩人として読まれがちであった李箱を、彼が生きていた帝国主義の文脈に再び置いて、その中でもがき生きる植民地的実存の分裂と葛藤を再評価しようとする試みであると言える。植民地的実存の分裂と葛藤という表現には暗いイメージが付随するが、そのような状況のなかで「近代」を生きようとする詩人の希望と夢も描かれていることを見逃してはいない。

口述試験では、各審査員の意見の違いが表面化したが、最終的には、本論文が李箱文学の新しい読み直しを提案している画期的な論文であることで全員の意見が一致した。異論・苦言としては次のような意見が聞かれた。

- ・第一章と第二章は独創的ですが、第三章と第四章は求心力を欠き、論旨が散漫になっている箇所が見受けられる。また、論文全体の構成も改良すべき余地がある。
- ・先行研究の扱い方に難がある。批判するために引用するのではなく、膨大な先行研究の中には持論の補強に使えるものもあるはずであるから、建設的な先行研究の引用が望まれる。
- ・初期の日本語詩について、「異常ナ可逆反応」の分析は画期的で素晴らしいが、「破片の景色」と「▽の遊戯」の分析は十分と言えない。「△」・「俺」・「▽」の解釈は詩人李箱の中での分裂を論じる上での肝なのでより説得力のある解釈が必要である。

以上のような指摘があったが、本論文が李箱文学の研究において斬新な新しい方向性を提示しているのは明らかなので、本審査委員会は、本論文が博士學位論文として十分にその水準に達していると判断した。